

# 参加者募集!!

阿佐ヶ谷ワークショップ

シェイクスピアと同時代人ジョン・ダンの詩を読む会  
『唄とソネット』を読む

2023年1月17日(火)より開始

第1回目はジョン・ダンの伝記・作品概要についてのオリエンテーション、以後

開催日: 毎月第3火曜日、午後2時～4時

会場: 阿佐ヶ谷ワークショップ

参加費: 1000円

案内役(講師): 高木 登 mail: n.takaki@jcom.home.ne.jp

TEL: 090-5318-5174



ジョン・ダン(1572-1631)はシェイクスピアと同時代の詩人で、同じく同時代人であるベン・ジョンソンから「当代随一の詩人」と言われています。英国での評価の高さに比べて日本ではほとんど知られていませんが、ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』のタイトルはジョン・ダンの作品から取られたものであり、またダンの宗教詩の一節、「死よ、驕るなかれ」という文句を聞いたことがある方も多いかと思います。今回は、ジョン・ダンの詩を読む始まりにあたって、シェイクスピアの『ソネット集』と同じ時期に書かれた『唄とソネット』から読み始めます。

## 講師・高木登のプロフィール

1969年、北九州大学外国語学部米英学科卒。高校在学中、北九州の同人詩誌“沙漠”で詩を書き、大学在学中は詩誌“GRIFFIN”を発行し、詩集を自費出版する。シェイクスピアの『ソネット集』の翻訳、シェイクスピア劇の観劇日記、及びジョン・ダンの全詩集の翻訳などをHP(「あーでんの森散歩道」)に掲載。

会場: NPO 法人 阿佐ヶ谷ワークショップ

〒166-0001

東京都杉並区阿佐ヶ谷北 2-15-4

大和阿佐谷ビル 201号

Tel: 03-5356-7438 Fax: 050-3737-2653

E-mail: 2154@asagayaworkshop.com

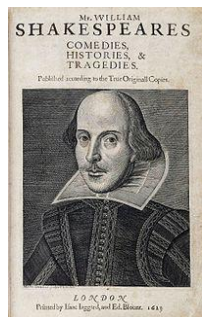
HP: <http://www.asagayaworkshop.com>

住所: 杉並区阿佐ヶ谷北二丁目十五番四号  
大和阿佐谷ビル201号  
(阿佐ヶ谷ワークショップ案内図)



シェイクスピアと同時代人ジョン・ダン  
ーイギリス・ルネサンス期の最高の形而上詩人ー

高木 登



全集本（フォリオ）のシェイクスピア



若き日のジョン・ダン

## 第1章 ジョン・ダンの生涯

- 1572年 ロンドンのブレッド・ストリートで、6人の子供の3番目に生まれた。父親のジョンは金物商会の商人で、ウェールズ南西部の州カーマサンシア、キドウェリーのウェールズの子孫であると称していた。母親のエリザベスは終生カトリック教徒で、寸鉄詩人にして狂言作家のジョン・ヘイウッド（1497-1580?）の娘。ヘイウッドの妻はトマス・モアの姪エリザベス・ラステル。母親の二人の兄、エリス・ヘイウッドとジャスパー・ヘイウッドはジェズイット教徒で二人は国外に逃亡。ジャスパーは、1581年から83年にかけてジェズイットの密命を受けてイングランドに潜入したが捕まって死刑を宣告され投獄されたが、国外に追放された。
- 1576年 1月（?）、父、ジョン死亡（43歳?）  
7月（?）、母、ロンドンのトリニティ・レインの医師ジョン・サイミンズと再婚。
- 1577年 姉エリザベス・ダン死亡。
- 1581年 11月、メアリーとキャサリンの二人の妹が死亡（11月25日埋葬）。
- 1583年 伯父ジャスパー・ヘイウッドが1581年からイングランドにイエズス会の伝道に来

ていたが、捕まり投獄される（12月）。

- 1584年 2月、ジャスパー、死刑宣告され、ロンドン塔に送られた。  
10月、弟のヘンリー・ダンとオックスフォード大学ハートホールに入学。
- 1588年 1月、ジャスパー釈放され、フランスに追放される。  
7月、継父ジョン・サイミンズ死亡。
- 1588-9年 ケンブリッジ大学で学ぶ。ケンブリッジ大学で生涯の友人となるグッディアとオットンに出会う。
- 1589-91年 外国旅行?（イタリア、スペイン?）。そこで伯父のジャスパー・ヘイウッドやその他のイギリスのカトリック亡命者と出会った可能性がある。
- 1590-1年 母、カトリックの紳士リチャード・レインズフォードと結婚。
- 1591年 セイヴィズ法学院に入学。
- 1592年 5月、リンカンズインに入学。
- 1593年 2月、リンカンズインの祝宴事務長となる。リンカンズインの時代、ダンの友人エドワード・ハーバートの母マグダレンと出会っていると推定される。ダンと彼女との交友は1627年に彼女が亡くなるまで続いた。彼女は知性的で、敬虔で、しかも熱情的な女性であった。40歳を超えて未亡人となったとき、彼女の半分ほどの年齢の、サー・ジョン・ダンヴァーズと結婚した。1590年代には、彼女はウェールズ国境にあるモンゴメリー城に住んでいた。'The Primrose'や'The Blossom'は彼女に関連した詩といわれる。
- ダンがケンブリッジの関連でマーロウと出会った可能性がある。彼の『エレジー』はオウディウスの『恋の歌』にあるマーロウ版エレジーから取られているように思われる。ダンは、マイター亭やマーメイド亭に通っていたので、ベン・ジョンソンやシェイクスピアを知っていた可能性がある。
- 6月（21歳）、父親の遺産相続として750ポンド受け取る。弟のヘンリーがカトリック教徒のウィリアム・ハリントンを匿った罪でニューゲイトに投獄され、牢獄で疫病のため死去。
- 1594年 4月、弟の遺産相続分を受け取る。
- 1595年 資産家の紳士として生計を立てるべく、従者の仕事に就く。

- 1596年 6月、エセックス伯とローリー卿のもとに、カディス遠征に志願兵として加わり、プリマウスから船出し、カディスを攻撃し、略奪する。8月、イギリス艦隊と共に帰国。
- 1597年 7月10日、フェローランド攻撃のために遠征するが、嵐のために船団は散り散りとなり、プリマウスに戻る。8月15日、アゾレス群島へ遠征、イギリス艦隊はアゾレス群島中心の島ファイアルを手中にするが、スペインの財宝を積んだ艦隊攻撃に失敗。書簡詩、'The Calm'と'The Storm'はこの時の経験を書いたものである。
- 10月、イングランドに戻り、国璽尚書のサー・トマス・エジャトンの秘書となり、エジャトンの住居、ストランド街のヨークハウスに移る。この年、ダンはエジャトンの二度目の妻の姪であるアン・モアと出会って恋に陥る。
- 1599年 9月26日、エセックス伯のもとでアイルランド遠征に加わって戦死したエジャトンの息子の葬儀で剣持ち役を務める。
- 1600年 1月20日、エジャトン夫人死去。アン・モアはルーズリーの父のもとに戻る。
- 10月、エジャトン、ダービー伯夫人アリスと再婚。ダンはそれに伴いヨークハウスからサヴォイの近くに移り住む。
- 1601-2年 10-12月、エジャトンの支配地であるノーサンバランド州の自治都市ブラックリーの代議員として議会に出席する。アン・モアが父親のサー・ジョージ・モアとロンドンに戻って来て、12月にダンとアンは秘密結婚する。1602年2月にアンの父親に結婚を打ち明け、ダンは一時フリート監獄に投獄され、エジャトンからも解雇される。高等宗務裁判所によって結婚の有効性が認められたが、経済的にひっ迫し、アンの従兄フランシス・ウォリーの援助で二人はサリー州のピアフォードで一緒に暮らすことになる。
- 1603年 長女コンスタンス誕生。8月、ジェームズ一世とその廷臣が巡行の途中ピアフォードのウォーリーの処に滞在。
- 1604年 長男ジョン誕生。
- 1605年 サー・ウォルター・シュートに同伴して大陸を旅行。2月にイングランドを立ち、パリやヴェニスを訪れる。
- 1606年 4月ごろイングランドに戻る。家族と共にミッチャムの二階建ての小さな家に移り住む。
- 1606-10年 (34-38歳) ラトランド伯のチャブレイン、トマス・モートンを助けてローマ教会を論駁する文を書く。
- 1607年 1月8日、三男フランシス、洗礼。ダン、ストランドのティンコム之家に1611年まで下宿する。6月、王妃の王室に職を求めるが失敗。『ヴォルポーネ』に関するラテン語の詩が出版される。
- モートン、グロースターの司教となり、ダンに聖職に就くように促すが、ダンはその任にあらずと断る。
- 1608年 8月8日、次女ルーシーが洗礼。名付け親はベッドフォード伯爵夫人ルーシー。
- 11月、アイルランドでの秘書の仕事を求めるが不成功に終わる。冬場に神経炎で床に伏し、「連祷」(A Litany)を書く。
- 1609年 2月、ヴァージニア会社の秘書の仕事を求めるが失敗。フェラボスコ(1575-1628年。ジェームズ一世とチャールズ一世に仕えた作曲家)の"Airs"に'The Expiration'を発表。12月12日、三女ブリジェット、洗礼。
- 1610年 1月、「偽殉教者」を発表しジェームズ一世に献呈。君主に対する忠誠の誓いの政府の政策を支持する。4月、オックスフォード大学から名誉文学修士の肩書を得る。
- 1611年 1月、四女メアリー誕生。『イグナティウス秘密会議』出版。『コリヤットの未完成品』で「トマス・コリヤット氏の未完成品に関して」を出版。
- 11月、妻と家族をワイト島の義弟に託して、サー・ロバート・ドルリー一行と大陸への旅に立ち、12月にフランス北部のアミアン着。
- 「この世の解剖(一周忌の歌)」を出版。
- 1612年 「一周忌と二周忌の歌」を出版。
- 1月、ドルリー家とパリに行き、そこで病気になる。妻が死産する。
- 4-8月にかけてドルリー家とドイツ、ベルギーを旅し、9月に帰国。家族と共に、ドルリーレインのドルリー家の私有地に引き越す。
- コーカインの『エアーズの第二書』に「夜明け」(Break of Day)を出版。
- 11月6日、ヘンリー王子死去。

1613年 2月14日、王妃エリザベスとパラタイン選帝侯が結婚。  
3-4月、ウォリックシャーのポールズワースに、サー・ヘンリー・グッディアを訪問し、4月にモンゴメリー城にサー・エドワード・ハーバートを訪問。  
7-8月、四男のニコラス誕生。  
「比類なき皇太子ヘンリーの早すぎる死を悼む挽歌」を出版。

1614年 4-6月、トーントン（イングランド南西部サマセット州の町）の国会議員となる。  
5月、四女のメアリー死去（3歳）。国家の仕事に就こうと試みるも不成功。  
11月、三男のフランシス死去（7歳）。

1615年 1月23日、セントポール寺院の執事兼司祭となる。王家付き司祭に任命され、ジェームズ一世とケンブリッジに随行。3月に王命によりケンブリッジ大学の神学部博士を授与される。4月、五女マーガレット誕生。グリニッチで女王の前で説教（現存するダンの最初の説教）。6月、キャンバウエル（以前のロンドンの行政区の一つで現在のサザークの一つ）とインナーテンプル（法曹学院）で説教。

1616年 8月10日、妻アン、死産。8月15日、妻、死去。

1619年 5月、ドイツ君主とボヘミア君主の調停の大使として向かうドンカスター子爵の従軍司祭として共にドイツへ。6-7月、パラタイン公と王妃への説教でハイデルベルグに。12月には帰路、ハーグで説教。

1620年 1月 ドンカスター大使と共に帰国。

1621年 11月22日、セントポール寺院の司祭に選ばれ、就任。12月25日、セントポール寺院で説教。

1623年 11-12月、回帰熱で重病となる。12月、長女コンスタンス（20歳）が海軍大臣一座の俳優であったエドワード・アレン（57歳？60歳とも）と結婚。

1625年 3月27日、ジェームズ一世死去。4月3日、チャールズ一世の前で説教、出版。  
7-12月、ロンドンで疫病流行。チェルシーのサー・ジョン・ダンヴァーズ邸に避難。

1626年 2月、聖職者会議の議長に選ばれる。2月2日、チャールズ一世、即位。宮廷で王の前で説教、出版。コンスタンスとアレンの結婚が破綻。アレンはその年に死去。カルトウジオ会修道院の院長に任命される。ベッドフォードシャーの治安判事に任命される。

1627年 1月、次女のルーシー死去（19歳）。3月18日、サー・ヘンリー・グッディア死去。  
5月21日、ベッドフォード伯爵夫人ルーシー死去。6月、マグダレン・ダンヴァーズ夫人（マグダレン・ハーバート）死去、ダン、葬儀にあたって説教をし、出版される。

1628年 2月、生涯の親友クリストファー・ブルック死去。

1630年 6月24日、コンスタンス、アルドバラ・ハッチのサムエル・ハーヴェイと結婚。  
アルドバラ・ハッチにコンスタンスを訪問している時、重病となる。12月、遺書を書く。

1631年 1月、ダンの母死去（86歳？）。2月25日、宮廷で最後の説教（死後、『死の対決』として出版される）。2月26日、カルトウジオ修道院の院長会議に出席。3月31日、ダン死去。4月3日、セントポール寺院に埋葬。

## 第2章 ダンの評価と作品論—『唄とソネット』を中心に—

- (1) 湯浅信之訳『ジョン・ダン全詩集』の「解説」より。「ジョン・ダンの魅力」は、
  1. 彼の生きた時代がイギリスの中でも最も複雑な政治的、宗教的要素を抱えていた。
  2. 彼の人生が紆余曲折に溢れ、大変に難しい決断の連続があった。
  3. 彼の死がその個性的な表現形式の故に、イギリス文学史の中で絶えず問題視されてきた。
  4. 「形而上学詩」について—ジョン・ドライデンが1692年に「風刺詩の発生と発展に関する論説」において初めて「形而上学」という語を用いて批評し、元来は非難の言葉であった。
  5. T. S. エリオットによれば、ダンには「感受性の分裂」（感じることと、考えることが別々となった）以前の詩人であった。
- (2) 吉田幸子著『ジョン・ダンの異端と正統』（2000年2月、英宝社刊）より『唄とソネット』『恋愛エレジー』『諷刺詩』などの世俗詩に、ダンは異、叛逆、裏切り、陰謀といった概念を隠喩として用いていた。彼の詩作品において、いわば政治は内

在化されていた。

- (3) 岡崎眞紀子著『パラドックスの詩人、ジョン・ダン』（2007年5月、英宝社刊）  
（第1章 愛と修辭のパラドックス、第3章 マニエリスのパラドックス）
1. ジョン・ダンはパラドックスの詩人である。
  2. 『唄とソネット』の恋愛詩は一篇一篇切り離して読むと、それぞれ完結しながら、時として互いに相矛盾するのに、一つの完結体となっている。
  3. 完全無欠な愛は「無」(nothing) としか呼びようがない。その正体が本人にも分からない完全無欠の愛である「無」、これこそがダンの愛の詩の鍵と言える。
  4. ダンの世界では、恋人たちの世界は一個の完結した世界、もしくは宇宙によく喩えられる。恋人たちは互いに深く愛し合うがゆえに全世界、全宇宙と化すが、それも破壊されて、「カオス」へ「無」へと戻って行く。すべてが逆説へと運ばれていくのがダンの恋人たちである。一つの愛を「完全」と言い切ることは、その愛の限界を示すことになる。「不完全」であることを認めるところにこそ「完全」な愛の可能性を見ることができる。
  5. ダンの恋愛詩は、あまりにおおらかでエロティックな愛の賛美、余りに激しい愛の呪詛、表現の際どさ。複雑で、人間存在の根幹に関わる。

### 第3章 ジョン・ダンの詩作品—A. J. スミスの全詩集（ペンギン・クラシック）

- (1) 『唄とソネット』55篇
- (2) 『書簡詩』37篇
- (3) 『エレジー（恋愛詩）』20篇+1篇
- (4) 『婚礼祝歌』4篇
- (5) 『風刺詩』5編
- (6) 『エピグラム』20篇
- (7) 『魂の遍歴』
- (8) 『挽歌と葬送歌』7篇

(9) 『記念日の歌』5篇

(10) 『宗教詩』—「聖なるソネット」7篇、「神に捧げる瞑想」19篇、「嘆願の連禱」ほか10篇

### 第4章 ジョン・ダンに関する書籍

(1) ジョン・ダンの伝記

1. “Lives of Donne”, Izaak Walton (1651)
2. “The Life and Letters of John Donne”, Edmund Gosse (1899)
3. “John Donne, The Reformed Soul”, John Stubbs (2007)

(2) 詩の選集・全集

1. 『ジョン・ダン全詩集』湯浅信之訳（名古屋大学出版会、1996年）
2. 対訳『ジョン・ダン詩集』湯浅信之編（岩波文庫、1995年）
3. 『ダン詩集』星野徹訳編、『エレジー』の一部と『唄とソネット』（思潮社、1968年）
4. 『エレジーと唄とソネット』河村錠一郎訳（現代思潮社、1977年）
5. *John Donne, The Complete English Poems*, edited by A. J. Smith (Penguin Classics, 1996)
6. *Complete English Poems, John Donne*, edited by C.A. Patrides (Everyman, 1994)
7. *John Donne, The Major Works*, Edited by John Carey (Oxford, 1990)
8. *John Donne, Selected Poems*, Edited by Richard Gill Oxford Student Text, 1990)
9. *John Donne's Poetry*, Edited by Donald R. Dickson (A Norton Critical Edition, 2007)
10. *The Collected Poems of John Donne*, Edited by Roy Booth (Wordsworth, 2002)

(3) 参考書

1. *Student Guide to John Donne*, By Sean Haldane (Greenwich Exchange, 2003)
2. *John Donne Life, Mind and Art*, by John Carey (Faber and Faber, 1981)

## ジョン・ダン散文集、『パラドックス』より

### 女性の「移り気」に対する弁護

女は移り気であるということ、そして「移り気」は良くない性質であるということに反論する。

すべてのものは変化する。天は絶えず回転し、星は移動し、月は変化する。火は渦巻き、空気は流れ、潮は満ち干する。大地の表面はその姿を変化させる。時は留まることがない。色明るければ、染まり易く、人においても最も理性ある者ほど、変わり易く、暗くて無知な者ほど変化は稀である。したがって、女は男より変わり易いがゆえに、男より理性的であるといえる。女性は、木の幹や、岩、大地の中心のように不変でありえない。

使われない鉄は錆びる。澱んだ水は腐敗する。流れぬ空気は毒される。ならばどうして女性を不完全なものとして責め立てるのか。

それは女が男をそれで欺くからにはかならない。

諸君の知性は君らの期待を裏切る次のジョークが気に入らないだろうか。欺かれて困難な立場に陥ることを喜びとし、この世で最も素敵な遊びは「裏切り」であると。

私は、諸君が貞節で、下着を絶えず着替えるような調子で心を変えることもなく、不品行など目にすることもない、志操堅固な恋人を持てればと願っている。「移り気」は最もほめるに足る、りっぱな性質である。女性はこの性質において、天や、星、月、それに地上のいかなるものに対しても、絶対的な立場にある。長い観察の結果、女性の気が変わりやすいというのは確かなことである。

識者は恒星、星座、惑星に通じていて、そこから性格だけでなく、天の意味するところを読みとることができる。どんな愚かな連中でも月の変化を予言することができるが、私としては女性の心の変化を読み取ることのできる学識者が欲しいところである。

学問は女性の心を裁定する知識に乏しく、その法則にも欠けている。科学の教えでは、軽い物は上に昇り、重い物は下に沈む。反対に経験が教えることは、「軽い女」の性質はすぐ

に倒れることであり、女性の性質はすべての人工と自然と反するものである。

女は、我々の食卓に同席して食事する蠅のようなものであり、我々の血を吸う蚤のようなものでもある。無遠慮も構わず我々の秘密の場所から去ろうともせず、親しく交わっても、飼いなされることもなく、我々の指図も受けることもない。

女性は太陽のようでもある。激しく一方の道を進んでは、正反対の方向に進路をとる。高圧的で手に負えないような夫の支配に屈するように見えても、夫の知らない意向を抱いている。好みのうるさい性質を知ろうとすることは疲れるだけである。

女性はその巧みな変わり身と、人を喜ばす二重性で反感を防ぎ、よく分からないだけでなく、ますます不可解となる。すべての女は「学問」である。生涯をかけて女というものを研究する者は、最後には女についての知識不足を覚ることになる。

女性は知性の驕りと、知識の名誉心を罵倒し、女を大胆にも口説こうとする愚かな者を賢者にし、骨折り損だと考える賢者を虚仮にする。知性の高い者は不確実性に困惑して気も狂わんばかりである。

哲学者たちは他のすべてのことで得た知識の結論から、価値観からではなく悪意から、女性を批判的に書くが、それは彼らが女性について何も知らないだけでなく、単に無知なだけである。行動的で経験豊かな男たちが女性を毒づくのは、すべての美点が失せて生気のない年老いた時に愛するからである。

こういった悪意のある中傷者たちが女性に不都合なバラッドを作るのは、彼らが女性の愛を得るのに値するものをなにも持たず、自分が得ることができないものに悪意を持ってけなすことしかできないからである。このような連中は、自分が受け入れてもらえず、見捨てられると、「移り気」を大いに貶し、ののしることができるのは、物知りであるからと人に信じさせようとするものだ。

私の考えでは、そんな連中は女性が移り気だからこそ幸せと言うものだ。彼らが美しい女性から愛されるチャンスに恵まれるのは（彼らにその順番が回ってきたとき）、彼ら自身の価値からではなく、女性の移り気、変わりやすさからである。

男は一人だけではないのに、女が一人の男に固定されなければならない理由など、どこにあるだろうか。女にとって、一人の男のいくつかの美点を味わうより、あらゆる美点をいろんな男から味わう方がよほど正しいことであり、そうしなかったら、一つの皿に色んな種類

の肉を切り刻んで一緒くたにしたようなもので、味を損なうことになる。一人の人間にあらゆる美点があるとすれば（そんなことが可能だとしたら）、それは混乱と雑多でしかない。

頑なに女性の価値を軽視し、女性の素晴らしさを十分に理解しようとしないう者を除いて、女性を除くすべてのものを服従させることができ、あらゆることに賢明になることができるのに、女性に対していつまでも愚かなままである男の中で、女性は最も素晴らしい創造物であることを否定できる者などいるであろうか。

最も優れた学者も、一旦妻を娶れば、無学をさらけ出し、角本（注1）を手引きにして「移り気」を学ばなくてはならない。

故に、結論。この「移り気」という名前は中傷で毒されているので、「多様性」という名に変えるべきである。この世は多様性のゆえに楽しく、女は多様性のゆえにこの世で最も魅力的なものである。

（注1）角本（つのほん）は、昔の小児用教本で、アルファベットなどを書いた紙を板に張り付け、透明の角質の薄片で皮膜を施した。角本の名は、この角質の張り皮に由来する。

## 女性は化粧すべし

醜いのは忌むべきことだ。それは避けることができることだろうか。

恋人に、腰を締めるなどか、不揃いな脚を靴で矯正するなどか、歯を磨き、香水で口臭をごまかすなどという者はいないだろう。

顔についてはもっと重要なことなので、丹念に注目する必要がある。

罪を隠さずに白状する者は間違いなく罰を受けるが、目撃者もなく、用心深く犯罪を隠す者は罰を逃れる。そういうことで、隠された部分に関してはあまり注意を要さない。

然るに、顔の場合は衆目を集める場所でもあり、油断は禁物である。

顔は、絶えず人の目を引き付けるだけでなく、魂の不思議で神秘的な結合である接触、接吻を受けるところでもある。

彼女が君より劣る男に身を任せたら、君は真剣に声高に抗議するだろう。修復するのに簡単で手頃な方法もないのに、彼女の体を暴君の掠奪者、すべての女性の美を不意に奪う者に

売り渡すのは、憎むべき不義であると。

君が彼女の中で気に入っているのは顔だが、それには化粧が施されている。君がそれを憎むのは化粧そのものではなく、そのことを知っているからである。

無知が愚かさを幸せにしてくれるのだ。

君が崇める星や、太陽、大空には色がなくとも美しいが、それは彩られているように見えるからである。

君が彼女の見かけに満足しないとしても、彼女が化粧をしているのを見れば、彼女の顔色で十分そのことを確信する。

彼女の顔が板や壁に描かれれば、君はその絵を愛するだけでなく、板や壁まで愛するだろう。それが口を聞いたり、ほほ笑んだり、口づけしたりすると、絵に描かれたものだからといって君は嫌だと思うだろうか。

自然にあるものより、絵に描かれた鳥や果物や獣を見るのを喜ばないことがあるだろうか。絵に描かれた怪物や悪魔の姿を見て、本物ではないと見なして楽しまないだろうか。

我々が家の壊れた部分を修理するのは、嵐の冷たい気配を身に感じてからである。

衣服の汚れやほころびを繕うのは、最初に目障りに思っ、ほかの体の部分が不快に感じるからである。

だが、女の用心によってこのことは避けることができる。

彼女に口づけし、息を吹きかけて、化粧が剥げれば君は怒るだろう。

化粧がしっかりついておれば、君は怒ったりするだろうか。

君は彼女を愛していた。

もし君が彼女を嫌うようになったとすれば、それは彼女が化粧をしていないからだ。

もし君が今、彼女を前から嫌っていたと言うのであれば、君は彼女を憎み、かつ、愛していたのだ。

何があっても心変わりせず、君を愛しているように見せるのに骨折ることで、君に大いなる愛を示す彼女を愛すようにしたまえ。